

【晉紀四十】起強圉大荒落，盡屠維協洽，凡三年。

■東晋、●北魏、▲北燕、続国訳漢文大成 經子史部 第7巻 160p

安皇帝癸義熙十三年（丁巳，417年）

■春，正月，甲戌（1日）朔，日之食する有り。

後秦 **〔安定の齊公恢は長安に進軍するも討たれる〕** 秦主の泓は百官を前殿に朝會し、内外（内は兄弟の内訌、外は晉夏の侵略）は危迫するを以て、君臣は相い泣く。征北將軍の齊公の恢は安定の鎮戸三萬八千を帥いて、廬舎を焚き、北雍州（秦の嶺北五郡、安定に治す）より長安に趨き、自ら大都督、建義大將軍と稱し、檄を州郡に移し、君側之惡を除かんと欲す。揚威將軍の姜紀は衆を帥いて之に歸し、建節將軍の彭完都は陰密を棄てて奔りて長安に還る。恢は新支に至り、姜紀は恢に説いて曰く、

「國家の重將、大兵は皆な東方に在り、京師は空虛にして、公はすみやかに輕兵を引いて之を襲えば、必ず克たん。」

恢は従わず、南に郿城（陝西省關中道郿県、現・宝鸡市眉県）を攻める。鎮西將軍の姚萇（前年雍を捨てて東に奔り郿に拠る）は恢の敗る所と為り、長安は大震す。泓は使いを馳せて東平公の紹を征（続は徵）し、**（7-161p）** 姚裕及び輔國將軍の胡翼度を遣わして豊西（陝西省關中道にあり、渭水に入る）に屯せしむ。扶風太守の姚俊等は皆な恢に降る。東平公の紹は諸軍を引いて西に還り、靈台（長安県）に於いて恢と相い持つ。姚贊（続は讃）は寧朔將軍の尹雅を留めて弘農太守と為し、潼關を守らしめ、亦た兵を引いて還る。恢の衆は諸軍の四集するを見、皆な懼れる心有り、其の將の齊黃等は大軍に詣りて降る。恢は兵を進めて紹に逼り、贊は後より之を撃ち、恢の兵は大敗し、恢及び其の三弟を殺す。泓は之を哭して慟す、葬するに公の禮を以てす。

■ **〔劉義隆を徐州刺史として留める〕** 太尉の裕は水軍を引いて彭城を發し、其の子の彭城公の義隆（後の文帝）を留めて彭城に鎮せしむ。詔して義隆を以て監徐、兗、青、冀四州諸軍事、徐州刺史と為す。

西涼 **〔涼公の暠は卒す〕** 涼公の暠は疾に寢、長史の宋繇に遺命して曰く、

「吾が死する之後は、世子は猶ほ卿の子のごとき也、善く之を訓導せよ。」

二月、暠は卒し、官屬は世子の歆きんを奉じて大都督、大將軍、涼公と為し、涼州牧を領せしむ。大赦し、改元して嘉興とす。歆の母の天水の尹氏を尊して太后と為す。宋繇を以て三府（大都督大將軍府・涼公府・州牧府）の事を録せしむ。暠に諡して武昭王と曰い、廟號を太祖とす。

西秦 **吐谷渾** **〔吐谷渾は阿柴の登場で強国となる〕** 西秦の安東將軍の木奔干は吐谷渾の樹洛干を撃ち、其の弟の阿柴を堯桿川（青海のほとり）に破り、五千餘口を俘にして而して還る。樹洛干は走りて白蘭山（青海の西南）を保ち、慚憤して疾を發し、將に卒せんとし、阿柴に謂って曰く、

「吾が子のしゅうけん拾虔は幼弱なり、今大事を以て汝に付ける。」

樹洛干は卒し、阿柴は立ち、自ら驃騎將軍、沙州刺史と稱す。樹洛干に諡して武王と曰う。阿柴はようや稍く兵を用い其の傍の小種を侵し並せ、地方は數千里、遂に強國と為る。

北涼 **〔蒙遜勢力拡大〕** 河西王の蒙遜は其の將を遣わして烏啼部（張掖の刪丹県、甘肅省甘涼道山丹県、金山の西、現・張掖市山丹県）を襲い、大いに之を破る。又た卑和部（青海畔の羌族）を撃ち、之を降す。

【劉裕は洛陽から長安へ向かう】

■ **〔王鎮惡は潼關に至る〕** 王鎮惡は進みて澠池（河南省河洛道澠池県、現・三門峽市澠池県）に軍し、毛德祖を遣わして尹雅を蠡吾城（山西省河東道苗城県、芮城県なら現・運城市芮城県）に襲い、之を禽にし、雅は守者を殺して而して逃げる。鎮惡は兵を引いて徑ちに前み、潼關（現・陝西省渭南市潼關県秦東鎮）に抵る。

■ 檀道濟、沈林子は陝北より河を渡り、襄邑堡（山西省河東道苗城県、芮城県なら現・運城市芮城県）を抜き、秦の河北太守の薛帛は河東に奔（続は奔）る。又秦の并州刺史の尹昭を蒲阪（山西省河東道永濟県、現・運城市永濟市）に攻め、克たず。別將は匈奴堡（山西省河東道臨汾県、現・臨汾市堯都区）を攻め、姚成都の敗る所と為る。

後秦 ●辛酉（19日）、滎陽の守將の傅洪は虎牢（河南省開封道汜水県、現・鄭州市滎陽市汜水鎮）を以て魏に降る。

後秦 **〔潼關を巡る駆け引き〕** 秦主の泓は東平公の紹を以て太宰、大將軍、都督中外諸軍事と為し、黃鉞を假し、改めて魯公に封じ、武衛將軍の姚鸞等の歩騎五萬を督して潼關を守らせめ、又た別將の姚驢を遣わして蒲阪を救わしむ。

■ 沈林子は檀道濟に謂って曰く、

「蒲阪の城は堅く兵多し、猝に抜く可からず、之を攻めれば衆を傷つけん、之を守れば日を引かん。王鎮惡は潼關に在り、勢いは孤にして力弱く、鎮惡と勢いを合わせて力を并せるに如かず、以て潼關を爭はん。若し之を得れば、尹昭は攻めず自ら潰えん矣。」

道濟は之に従う。（7-162p）

■ **〔道濟、林子は潼關を破る〕** 三月、道濟、林子は潼關に至り、秦の魯公の紹は兵を引いて出でて戦い、道濟、林子は奮撃し、大いに之を破り、斬獲は以て千を數える。紹は退きて定城（陝西省關中道臨潼県、現・西安市臨潼区）に屯し、險に據りて拒み守り、諸將に謂って曰く、

「道濟等の兵力は多からず、懸軍は深く入り、壁を堅くして以て繼援を待つに過ぎず。吾は軍を分けて其の糧道を絶ち、坐して禽にす可き也。」

乃ち姚鸞を遣わして大路（南路に対して曹操の開いた北路をいう）に屯し以て道濟の糧道を絶たしむ。

後秦 **〔尹雅は助命される〕** 鸞は尹雅を遣わして兵を將いて晉と關南（潼關の南）に戦い、晉兵の獲る所と為り、將に之を殺さんとす。雅は曰く、

「雅は前日已に當に死せんとし、幸いにも脱して今に至るを得る、死は固より甘心す。然らば夷、夏殊なりと雖も、君臣之義は一也。晉は大義を以て師を行くに、獨り秦をして守節之臣有ら使めず乎！」

乃ち之を免す。

■ **〔沈林子は姚鸞を夜襲〕** 丙子（4日）夜、沈林子は銳卒を將いて鸞の營を襲い、鸞を斬り、其の士卒數千人を殺す。紹は又た東平公の贊（続は讚）を遣わして河上に屯さしめ以て水道を斷つ。沈林子は之を撃ち、贊は敗走し、定城に還る。薛帛は河曲（黄河が蒲阪から南して潼關に至り屈曲して東に流れる）に據りて來降す。

【北魏は道を貸し劉裕を牽制】

■ ● **後秦** **〔後秦の救援要請、北魏の崔浩は後を塞ぐを建議〕** 太尉の裕は水軍を將いて淮、泗より清河に入り、將に河を溯りて西上せんとし、先ず遣使して道を魏に假りる。秦主の泓は亦た遣使して魏に救いを請う。魏主の嗣は群臣をして之を議せしめ、皆な曰く、

「潼關は天險なり、劉裕は水軍を以て之を攻めるも、甚だ難し。若し岸に登りて北を侵せば、其の勢いは便ち易し。裕は聲言して秦を伐つも、其の志は測り難し。且つ秦は、婚姻之國（前卷義熙11年にあり）、救わ

ざる可からざる也。宜しく兵を發して河の上流を斷ち、西するを得ら使む勿かれ。」

博士祭酒の崔浩は曰く、

「裕は秦を圖ること久しき矣。今姚興は死し、子の泓は儒劣にして、國に内難多し。裕は其の危に乗り而して之を伐ち、其の志は必ず取らんとす。若し其の上流を遏むれば、裕の心は忿戾し、必ず岸に上がりて北を侵す、是れ我が秦に代わりて敵を受ける也。今柔然は邊を寇し、民の食も又た乏しく、若し復た裕と敵に為れば、兵を發して南に赴き、則ち北寇は愈々深く、北を救えば則ち南州（魏の南境の相州諸郡）は復た危うく、良計に非ざる也。之に水道を假し、裕の西上を聽すに若かず、然る後に兵を屯して以て其の東を塞がん。裕をして克捷せ使めれば、必ず我之道を假すを徳とす。捷たざれば、吾は秦を救う之名を失わず。此れ策之得たる者也。且つ南北は俗を異とし、借に國家をして恆山以南を棄て使むるとも、裕は必ず吳、越之兵を以て吾と河北之地を爭い守る能わず、安んぞ吾が患と為る能う乎！夫れ國の計を為す者は、惟だ社稷を是れ利せんとすのみ、豈に一女子を顧りみん乎！」

議者は猶ほ曰く、

「裕は西に關に入れば、則ち吾が其の後を斷ち、腹背に敵を受けるを恐れん。北上するときは、則ち姚氏は必ず關を出でて我を助けじ、其の勢は必ず西を聲して而して實は北する也。」

嗣は乃ち司徒の長孫嵩を以て山東の諸軍事を督さしめ、(7-163p) 又た振威將軍の娥清、冀州刺史の阿薄干を遣わして步騎十萬を將して河の北岸に屯さしむ。

■庚辰（8日）、裕は軍を引いて河に入り、左將軍の向彌を以て北青州刺史と為し、留めて碯磣（山東省東臨道在平県、現・聊城市在平区）に戍さしむ。

■「魏軍が黄河北岸に布陣して、進めず」 初め、裕は王鎮惡等に命ず、

「若し洛陽に克てば、大軍が到るを須ちて俱に進まん。」

鎮惡等は利に乗じて徑ちに潼關に趨き、秦兵の拒む所と為り、前むを得ず。之久しく、食乏しく、衆心は疑い懼れ、或は輜重を棄てて還りて大軍に赴かんと欲す。沈林子は劍を按じて怒りて曰く、

「相公（劉裕）の志は六合を清めんとす、今許、洛は已に定まり、關右は將に平らがんとし、事之濟否は、前鋒に繋る。奈何して勝ちに乗る之氣を沮み、垂成之功を棄てるや乎！且つ大軍は尚ほ遠く、賊衆は方に盛んなり、還るを求めんと欲すと雖も、豈に得可けん乎！下官は命を授けて顧みず、今日之事は、當に自ら將軍の為に之を辦ず、未だ知らず二三君子の將に何の面ありてか以て相公之旗鼓に見えん邪！」

鎮惡等は遣使して馳せて裕に告げ、糧援を遣わさんことを求め。裕は使者を呼び、舫（大艦）の北戸を開き、河上の魏軍を指さして以て之に示して曰く、

「我は語りて進む勿かれと令するに、今輕々しく佯して深入す。岸上は此くの如し、何の由か軍を遣わすを得るや！」

鎮惡は乃ち親ら弘農（河南省河洛道閩鄉県、現・三門峽市靈宝市北東）に至り、百姓を説諭し、百姓は競いて義租を送り、軍食は復た振う。

■「魏人の北岸での牽制に、劉裕は大鎚と槩の連打で反撃」 魏人は數千騎を以て河に縁いて裕の軍の西行に隨う。軍人は南岸に於いて百丈（南人は舟を引くに麻繩用いる）を牽き、風水は迅に急なり、漂いて北岸に渡る者有れば、輒ち魏人の殺略する所と為る。裕は軍を遣わして之を撃ち、裁かに岸に登れば則ち走り、退けば則ち復た來たる。夏，四月，裕は白直隊（白丁の壯士を選抜して左右に置く）主の丁晤を遣わして仗士七百人、車百乘を帥いて、北岸に渡らしめ、水を去ること百餘步、卻（続は却）月陣（半月陣）を為して、兩端は河を抱き、車には七仗士を置き、事畢われば、一白毳（白い羽毛）を豎て使む。魏人は其の意を解せず、皆

な未だ動かず。裕は先ず寧朔將軍の朱超石に命じて戒嚴せしめ、白牂は既に擧がり、超石は二千人を帥いて馳せ往きて之に赴き、大弩百張を繼ぎ、一車に二十人を益し、彭排（楯）を輶（^{えん}長柄、車を引く棒）上に設ける。魏人は營陣の既に立つを見、乃ち進みて之を圍む。長孫嵩は三萬騎を帥いて之を助け、四面肉薄して營を攻め、弩は制する能わず。時に超石は別に大鎚（おもりでは意味が通じない）及び槩（長矛）の千餘張を繼^{もたら}し、乃ち槩を斷ちて長三四尺とし、鎚を以て之を鎚^うち、一槩に輒ち三四人を洞貫す。（あたかも連射ミサイルの如し）魏兵は當たる能わず、一時に奔り潰え、死者は相い積む。陳に臨みて阿薄干を斬り、魏人は退きて畔城（山東省東臨道、現・聊城市東昌府区）に還る。超石は寧朔將軍の胡籓、寧遠將軍の劉榮祖を帥いて追撃し、又た之を破り、殺獲は千計り。魏主の嗣は之を聞き、乃ち恨みて崔浩之言を用いず。

後秦 **〔魯公の紹は反撃に失敗して憤死〕** 秦の魯公の紹は長史の姚洽、寧朔將軍の安鸞、護軍の姚墨蟲^{ようぼくら}、河東太守の唐小方を遣わして衆三千を帥いて河北之九原に屯せしめ、河を阻んで固めと為さしめ、(7-164p) 以て檀道濟の糧援（弘農諸県の糧援）を絶たんと欲す。沈林子は邀え撃ちて、之を破り、洽、墨蟲、小方を斬り、殺獲して殆んど盡くす。林子は因りて啟して太尉の裕に曰く、

「紹の氣は關中を蓋う、今兵は外に屈し、國は内に危うし。恐らくは其の凶命は先ず盡き、以て齊斧（出陣時には齋戒して斧鉞を得る、天下を整齊するの意味）に膏するを得ざらん耳。」

紹は洽等の敗死するを聞き、憤恚^{ふんい}し、發病して嘔血し、兵を以て東平公の贊に屬し而して卒す。贊は既に紹に代わり、衆力は猶ほ盛んにして、兵を引いて林子を襲い、林子は復た之を撃破す。

■ **〔劉裕は洛陽に入る〕** 太尉の裕は洛陽に至り、城塹を行視し、毛修之^{よみ}の完葺之功を嘉し、衣服玩好^{あたい}、直二千萬を賜わる。

● 丁巳（16日）、魏主の嗣は高柳に如く。壬戌（21日）、平城に還る。

北涼 **〔蒙遜は涼公を騙すも反撃される〕** 河西王の蒙遜は大赦し、張掖太守の沮渠廣宗を遣わして詐りて降らしめ、以て涼公の歆を誘い、歆は兵を發して之に應ず。蒙遜は兵三萬を將して蓼泉（甘肅省安肅道高臺県、現・張掖市高台县）に伏し、歆は之を覺り、兵を引いて還る。蒙遜は之を追ひ、歆は與に解支澗（晉書本紀には鮮支澗、宋書氏胡傳には西支間）に戦い、大いに之を破る。斬首は七千餘級。蒙遜は建康に城きづき、戍を置いて而して還る。

● **〔崔浩は劉裕の關中維持は難しいと看破、静觀を進める〕** 五月，乙未（24日）、齊郡太守の王懿（367年頃-438年は、前秦から南朝宋にかけての軍人。名が晋の宣帝司馬懿の諱を冒していたため、史書では字の仲徳と呼ばれることが多い。

本貫は太原郡祁県）は魏に降り、上書して言う、

「劉裕は洛に在り、宜しく兵を發して其の歸路を絶ち、戦わずして而して克つ可し。」

魏主の嗣は之を善とす。

崔浩は講に侍して前に在り、嗣は之に問いて曰く、

「劉裕は姚泓を伐つ、果たして克つ能う乎？」

對えて曰く、

「之に克たん。」

嗣は曰く、

「何の故や？」

對えて曰く、

「昔姚興は好みて虚名を事とし而して實用少なし、子の泓は儒にして而して病多く、兄弟は乖争^{かいそう}（弼・懿・

恢は泓と争う)す。裕は其の危に乗り、兵は精にして將は勇、何の故か克たざる！」

嗣は曰く、

「裕の才は何んぞ慕容垂の如きか？」

對えて曰く、

「之に勝り。垂は父兄之資に藉り、舊業を修復し、國人は之に歸し、夜蟲之火に就くが若し、倚仗(抛り所)を加えること少なく、以て功を立てるは易し。劉裕は寒微より奮起し、尺土を階とせず、桓玄を討滅し(115 卷元興 3 年)、晉室を興復し、北に慕容超を禽にし(115 卷元興 5-6 年)、南に盧循を梟し(115 卷元興 6-7 年)、向かう所前無し、其の才之人に過ぎるに非ず、安んぞ能く是くの如くならん乎！」

嗣は曰く、

「裕は既に關に入り、進退する能わず、我は精騎を以て直ちに彭城、壽春を搗けば、裕は將に之を若何せん？」

對えて曰く、

「今西に屈丐(赫連勃勃)有り、北に柔然有り、國の隙を窺き伺う。陛下は既に親しく六師を御す可からず、精兵有りと雖も、未だ良將を睹^みず。長孫嵩は治國に長ずれども、兵を用いるに短あり、劉裕の敵に非ず也。兵を興して遠く攻め、未だ其の利を見ず、且つ安靜にして以て之を待つに如かず、裕は秦に克ち而して歸り、必ず其の主を篡(奪)せん。關中は華、戎が雜錯し、風俗は勁悍なり。裕は荆、揚之化を以て之を函、秦に施さんと欲すも、此くは衣を解きて火を包み、(7-165p)羅^{あみ}を張りて虎を捕らえると異なる無し。兵を留めて之を守ると雖も、人情は未だ洽^{あまね}かず、趨尚は同じからず、適々寇敵之資と為すに足る耳。願はくは陛下は兵を按じ民を息^{やす}ませ以て其の變を觀れば、秦の地は終に國家之有と為る。坐して而して守る可き也。」

嗣は笑いて曰く、

「卿の之を料ること審^{つまびら}かなり矣！」

浩は曰く、

「臣は嘗て私に近世の將相之臣を論ず。王猛之治國の若きは、苻堅之管仲也。慕容恪之幼主を輔けるは、慕容暉之霍光也。劉裕之禍亂を平らげるは、司馬德宗之曹操也。」

嗣は曰く、

「屈丐(赫連勃勃)は何如？」

浩は曰く、

「屈丐は國破れ家覆り、孤子たる一身にして、姚氏に寄食し(114 卷 3 年)、其の封殖を受ける。恩に酬い義に報いるを思わず、而して時に乗り利を繳^{もと}め、一方を盗み有し、怨を四鄰(魏・秦・涼)に結ぶ。擻豎(擻起して自ら豎立す)たる小人にして、能く暴を一時に縱^{ほしいまま}にすと雖も、終には當に人の吞食する所と為る耳。」

嗣は大いに悦び、語りて夜半に至り、浩に御縹醪(青白色の濁り酒)十觚、水精鹽(透明な鹽)一兩を賜り、曰く、

「朕は卿の言を味わうは、此の鹽、灑の如く、故に卿と共に其の美を饗せんと欲す。」

然るに猶ほ長孫嵩、叔孫建に命じて各々精兵を簡^{えら}び、裕の西に過ぎるを伺い、成皋(現・鄭州市滎陽市汜水鎮西北)より河を濟り、南に侵彭(城)、沛(郡)を侵し、若し時に過ぎざれば、則ち兵を引きて之に隨わしむ。

●魏主の嗣は西巡して雲中に至り、遂に河を濟り、大漠に敗す。

●魏は天地四方の六部大人を置き、諸公(公位に居る者、公に従う位の者)を以て之と為す。

■ 「劉裕は陝に至る」 秋，七月，太尉の裕は陝に至る。沈田子、傅弘之は武關に入り，秦の戍將は皆な城を委てて走る。田子等は進みて青泥（陝西省關中道商県、現・商洛市商州区）に屯し，秦主の泓は給事黃門侍郎の姚和都をして嶢柳に屯せ使めて以て之を拒む。

■ 西秦 西秦の相國の翟勰は卒す。八月，尚書令の曇達を以て左丞相と為し，右僕射の元基を右丞相と為し，御史大夫の麴景を尚書令と為し，侍中の翟紹を左僕射と為す。

【長安の姚泓は劉裕に降伏】

■ 「秦主の姚泓の出陣も大敗す」 太尉の裕は閿郷に至り，沈田子等は將に嶢柳（陝西省關中道藍田県、現・西安市藍田県）を攻めんとす。秦主の泓は自ら將して以て裕の軍を禦がんと欲し，田子等が其の後を襲うのを恐れ，先ず撃ちて田子等を滅ぼし，然る後に國を傾けて東に出んと欲す。乃ち歩騎數萬を帥いて，青泥を奄至す。田子は本々疑兵を為し，領する所は裁かに千餘人，泓の至るを聞き，之を撃たんと欲す。傅弘之は衆寡敵せざるを以て之を止め，田子は曰く、

「兵は奇を用いるを貴ぶ，必ず衆に在らず。且だ今は衆寡は相い懸たり，勢いは兩び立たず，若し彼が圍いを結んで既に固ければ，則ち我の逃げる所無き矣。其の始めて至りて，營陳は未だ立たざるに乗りて，先ず之に薄るに如かず，以て功有る可し。」

遂に領する所を帥いて先ず進み，弘之は之に繼ぐ。秦兵は合して數重にも圍む。田子は士卒を撫慰して曰く、

「諸君は險を冒して遠來し，（7-166p）正に今日之戰を求め，死生は一決す，封侯之業は此に於いて在らん矣！」

士卒は皆な踴躍して鼓噪し，短兵を執りて奮撃す。秦兵は大敗し，馘の萬餘級を斬り，其の乘輿服御の物を得，秦主の泓は奔りて灊上に還る。

■ 初め，裕は田子等の衆の少なきを以て，沈林子を遣わして兵を將いて秦嶺（山脈、長安の南）より往きて之を助けしめ，則ち秦兵の已に敗れるに至り，乃ち相い與に之を追い，關中の群縣は多く潜かに田子に款を送る。

■ 「劉裕は潼關に至る」 辛丑（2日），太尉の裕は潼關に至り，朱超石を以て河東太守と為し，振武將軍の徐猗之と薛帛に河北で會し，共に蒲阪を攻め使む。秦の平原公の瑛は姚和都（成都の弟、和都と混同か）と共に之を撃ち，猗之は敗死し，超石は奔りて潼關に還る。東平公の贊は司馬國璠（東晋からの亡命者）を遣わして魏兵を引いて以て裕の後を躡ましむ。

■ 「王鎮惡は灊上突破」 王鎮惡は水軍を帥いて河より渭に入りて以て長安に趨くを請い，裕は之を許す。秦の恢武將軍の姚難は香城（渭水の北、蒲津の口にあり、陝西省關中道朝邑県、現・渭南市大荔県朝邑鎮）より兵を引いて而して西し，鎮惡は之を追う。秦主の泓は灊上より兵を引いて還りて石橋（長安城の洛門の東北に石橋あり）に屯し以て之が援と為し，鎮北將軍の姚強は難と兵を合わせて涇上に屯し以て鎮惡を拒む。鎮惡は毛德祖をして進撃せ使め，之を破り，強は死し，難は長安に奔る。

■ 東平公の贊は退きて鄭城に屯し，太尉の裕は進軍して之に逼る。泓は姚丕をして渭橋を守ら使め，胡翼度を石積（長安城の北）に屯し，東平公の贊を灊東に屯し，泓は逍遙園（長安城の西北）に屯す。

■ 「鎮惡は舟を流して後を絶つ、長安入城」 鎮惡は渭を溯りて而して上り，蒙沖（続は衝、軍船）の小艦に乗り，船を行う者は皆な艦内に在り。秦人は艦の進み而して行船者無きを見，皆な驚きて以て神と為す。壬戌（23日）旦，鎮惡は渭橋に至り，軍士に令す、

「食畢われば、皆な仗を持ちて岸に登らん、後に登る者は斬らん。」

衆は既に登り、渭水は迅急にして、艦は皆な流れに随い、倏忽として在る所を知らず。時に泓は將する所尚ほ數萬人あり。鎮惡は士卒を諭して曰く、

「吾が屬は并びて家は江南に在り、此は長安の北門^た為り、家を去ること萬里、舟楫、衣糧は皆な已に流れに随う。今進みて戦いて而して勝てば、則ち功名は俱に顯れん。勝たざれば、則ち骸骨は返らず、它（^続は他）岐（別の道）無し矣。卿等は之を勉めん！」

乃ち身ずから士卒に先んじ、衆は騰踴として争い進み、姚丕を渭橋に大破す。泓は兵を引いて之を救い、丕の敗卒の蹂踐する所と為り、戦わずして而して潰ゆ。姚謏等は皆な死し、泓は單馬にして宮に還る。鎮惡は平朔門（北門）より入り、泓は姚裕等と數百騎で逃げて石橋に奔る。東平公の贊は泓の敗れるを聞き、兵を引いて之に赴き、衆は皆な潰え去る。胡翼度は太尉の裕に降る。

後秦 「長安の姚泓は遂に鎮惡に降伏す」 泓は將に出で降らんとし、其の子の佛念は、年十一、泓に言つて曰く、

「晉人は將に其の欲は逞^{たくま}しく、降ると雖も必らず免れず、引決（自裁）するに如かず。」

泓は無然として應じず、佛念^{みやがき}は宮牆に登り自ら投げて而して死す。癸亥（24日）、泓は妻子、群臣を將いて鎮惡の壘門に詣りて降を請い、鎮惡は以て吏に屬す。（7-167p）城中の夷、晉は六萬餘戸、鎮惡は國恩を以て撫慰し、嚴肅を號令し、百姓は安堵す。

【姚泓を建康で斬る、洛陽遷都断念】

■ 「王鎮惡は貪婪で府庫を盗むを劉裕は追求せず」 九月，太尉の裕は長安に至り、鎮惡は灊上に迎える。裕は之を勞わりて曰く、

「吾が霸業を成す者は、卿也！」

鎮惡は再拜して謝して曰く、

「明公之威、諸將之力なり、鎮惡に何の功か之れ有らん！」

裕は笑いて曰く、

「卿は馮異（馮異が謙退して、功を誇らず、能く關中を定めたるに学ぶ）を學ばんと欲する邪？」

鎮惡は性は貪にして、秦の府庫は盈して積み、鎮惡が盜取（抜き取る）すること勝てて紀す可からず。裕は其の功大なるを以て、問わず。或は諸々を譖りて裕に曰く、

「鎮惡は姚泓の偽輦（天子の乗る車）を藏す、將に異志有らん。」

裕は人をして之を覘^{うかが}わしめ、鎮惡は其の金銀を剔ぎ取り、輦を垣の側に棄て、裕の意は乃ち安ず。

■ 「姚泓の儀器を収め、建康の市にて斬る」 裕は秦の彝器（宗廟に置く器具）、渾儀（渾天儀、天文觀測器具）、土圭（日時計）、記裡鼓（測量距離器具）、指南車（方位磁石）を収めて送りて建康に詣す。其餘の金玉、繒帛、珍寶は、皆な以て將士に頒賜す。秦の平原公の璞、并州刺史の尹昭は蒲阪を以て降り、東平公の贊は宗族百餘人を帥いて裕に詣りて降り、裕は皆な之を殺す。姚泓（後秦は三主34年で滅ぶ）を送りて建康に至り、市に於いて斬る。裕は薛辯を以て平陽太守と無し、北道を鎮捍（鎮め守る）せしむ。

■ 「洛陽遷都の断念」 裕は都を洛陽に遷さんと議し、諮議參軍の王仲德は曰く、

「非常之事は、固より常人の及ぶ所に非ず、必ず駭動を致さん。今師を暴^{きら}すこと日久しく、士卒は歸るを思い、遷都之計は、未だ議す可からず也。」

裕は乃ち止む。

■羌（姚氏が滅びて、奔る）の衆十餘萬口は西に隴上に奔り、沈林子は追撃して槐裡に至り、俘虜は萬を計る。
北涼河西王の蒙遜は太尉の裕が秦を滅すを聞き、怒ること甚し。門下校郎（群臣を司祭する官）の劉祥は入りて事を言う、蒙遜は曰く、

「汝は劉裕が關に入るを聞き、敢えて研研然（妍妍然、服飾の妍靡。河西の民は晉に親近感があり、胡人の蒙遜は内応を恐れる）たり。」

遂に之を斬る。

夏〔赫連勃勃は劉裕帰還後の長安を取らんとす〕初め夏王の勃勃は大尉の裕が秦を伐つを聞き（下線部欠、続により補充）、群臣に謂って曰く、

「姚泓は裕の敵に非ざる也。且つ其の兄弟は内叛し、安んぞ能く人を拒まん！裕は關中を取るは必ずなり矣。然るに裕は久しく留まる能わず、必ず將に南に歸り、子弟及び諸將を留めて之を守らんとする。吾が之を取るは、芥を拾う如き耳。」

乃ち馬に秣し兵を礪^{みが}き、士卒を訓養し、進みて安定に據り、秦嶺の北の郡縣の鎮戍は皆な之に降る。裕は遣使して勃勃に書を遣りて、兄弟と為るを約す。勃勃は中書侍郎の皇甫微をして報書を為ら^づ使め而して陰に之を育（続は誦）み、裕の使者に對し、口から舍人に授け之を書か使む。裕は其の文を読み、歎じて曰く、

「吾は如からざる也！」

■〔廣州の反乱鎮圧〕廣州刺史の謝欣は卒し、東海人の徐道期は衆を聚めて州城を攻め陥し、進みて始興を攻め、（7-168p）始興の相の彭城の劉廉之は討ちて之を誅す。詔して謙之を以て廣州刺史と為す。

●〔晉から秦への亡命者がまとめて魏に降る〕癸酉（4日）、司馬休之、司馬文思、司馬國璠、司馬道賜、魯軌、韓延之、刁雍、王慧龍及び桓溫之孫の道度、道子、族人の桓謐、桓璉、陳郡の袁式等は皆な魏の長孫嵩に詣りて降る。秦の匈奴鎮將の姚成都及び弟の和都は鎮を舉げて魏に降る。魏主の嗣は民間に詔して、

「姚氏の子弟を得て平城に送る者は之を賞す。」

冬、十月、己酉（11日）、嗣は長孫嵩等を召して還らしむ。司馬休之は尋いで魏に卒す。魏は國璠に爵の淮南公、道賜に爵の池陽子、魯軌の爵の襄陽公を賜る。刁雍は南鄙を求めて自ら效さんと表し、嗣は雍を以て建義將軍（義を立てて父兄の仇を報じさせる号）と為す。雍は衆を河、濟之間に聚めて、徐、亮に擾動す。

■太尉の裕は兵を遣わして之を討ち、克たず、雍は進みて固山（山東省濟寧道滋陽県、現・濟寧市兗州区）に屯し、衆は二萬に至る。

■詔して宋公の爵を進めて王と為し、十郡を増封す。辭して受けず。

西秦〔姚艾は西秦王の熾磐に投降〕西秦王の熾磐は左丞相の曇達等を遣わして秦の故將の姚艾（上邦の守將）を撃ち、艾は遣使して稱籙し、熾磐は艾を以て征東大將軍、秦州牧と為す。王松壽（12年に馬頭に屯し上邦に迫らせていた）を征（続は徴）して尚書左僕射と為す。

●十一月、魏の叔孫建等は西山（魏の安州）の丁零の翟蜀洛支等を討ち、之を平らぐ。

【劉裕は建康帰還を決意】

■〔留守居の劉穆之は卒し、劉裕は東に帰還を決意する〕辛未（3日）、劉穆之は卒す。太尉の裕は之を

聞き、驚愕し哀婉する者累日。始め、裕は長安に留まりて西北を經略せんと欲するも、而して諸將佐は皆な役久しく歸るを思い、多くは留まるを欲せず。穆之の卒するに會し、裕は根本に托する無きを以て、遂に東に還るを決意す。

■穆之の卒する也、朝廷は恒懼し、詔を發して、太尉の左司馬の徐羨之を以て之に代わらしめんと欲し、中軍咨議參軍の張邵^{ちやうしやう}は曰く、
「今は誠に急に病む、任は終に徐に在らん。然るに世子は命を專らにする無し、宜しく須らく之を諮るべし。」

裕は王弘を以て穆之に代らしむを欲し、從事中郎の謝晦は曰く、
「休元（王弘の字）は輕易なり、羨之に若かず。」

乃ち羨之は吏部尚書、建威將軍、丹陽尹と為り、代わりて留任を管ぜしむ。是に於いて朝廷の大事は常に穆之が決す者は、並せて悉く北の裕に咨る。

■【關中の支配体制】裕は次子の桂陽公の義真を以て都督雍、梁、秦、王州諸軍事、安西將軍と為し、雍、東秦二州刺史を領せしむ。義真は時に年は十二。太尉の咨議參軍の京兆王の修を以て長史と為し、王鎮惡を司馬と為して、馮翊太守を領せしめ、沈田子、毛德祖は皆な中兵參軍と為り、仍ち田子を以て始平太守を領せしめ、德祖を秦州刺史、天水太守（まだ劉裕は支配していない）に領せしめ、傅弘之を雍州治中從事史と為す。

■是より先、隴上の流戸の關中に寓する者は、兵威に因りて本土に復するを得るを望む；及ち東秦州を置くも、裕が復た西略之意無きを知り、皆な歎息して失望す。

■【王鎮惡と沈田子の対立の目は既にあり】關中の人は素より王猛を重んじ、(7-169p) 裕之長安に克つや、王鎮惡の功は多しと為し、是に由りて南人は皆な之を忌む。沈田子は自ら嶢柳之捷ちを以て、鎮惡と功を争いて平らかならず。裕は將に還らんとし、田子及び傅弘之は屢々裕に言つて曰く、
「鎮惡の家は關中に在り、保信する可からず。」

裕は曰く、

「今卿を留め文武將士は精兵萬人、彼が若し不善を為さんと欲すれば、正に自ら滅すに足る耳。復た多く言う勿かれ。」

裕は私に田子に謂つて曰く、

「鍾會（78 卷魏元帝咸熙元年にあり）が其の亂を遂げるを得ざる者は、衛瓘有りしを以ての故也。語りて曰く、『猛獸は群狐に如かず』、卿等十餘人は、何の王鎮惡を懼れるや！」

■【劉裕の態度が乱の原因】臣光は曰く、古人に言有り、「疑うは則ち任ずる勿かれ、任ずるは則ち疑う勿かれ。」裕は既に鎮惡に關中を委ね、而して復た田子と後言有り、是れ之を斗わ^{たたか}せて亂を為さ使む也。惜しい乎！百年之寇、千里之士、之を艱難に得、之を造次に失い、豐、鄠之都をして復た寇の手に輸さ使めんことを。荀子は曰く、「兼併は能くし易き也、堅凝（堅固に守りて失わず）は之れ難し。」

信なる哉！

■【劉裕の長安出發】三秦の父老は裕の將に還らんとするを聞き、門に詣りて流涕して訴えて曰く、
「殘民は王化^{うるお}を沾さず、今に於いて百年、始めて衣冠^みを睹、人人は相い賀す。長安の十陵は是れ公家の墳墓なり、咸陽宮殿は是れ公家の室宅なり、此れを捨てて何くに之かんと欲す乎！」（漢の劉氏の陵墓・宮殿なので、たまたま劉裕が劉氏なるをもって、慰留する）

裕は之が為に愍然として、之を慰め諭して曰く、

「命を朝廷に受け、^{ほしいまま}擅に留まるを得ず。誠に諸君の本を^{おも}懷う之志を多とする、今次息（次男）を以て文武の賢才と共に此の境を鎮ぜしむ、勉めて之と居れ。」

十二月，庚子（3日），裕は長安を發し，洛より河に入り，汴渠を開きて以て歸る。

●**〔氏豪は北魏に投降〕**氏豪の徐駭奴、齊元子等は部落三萬を擁して雍に在り，遣使して魏に降を請い。魏主の嗣は將軍の王洛生を遣わし、河内太守の楊聲等は西行して以て之に應ぜしむ。

●**閏月**，壬申（元嘉曆一月、5日），魏主の嗣は大寧の長川に如く。

●**〔北魏は秦雍の流民をよく懷かせて南雍州を置く〕**秦、雍人の千餘家は襄邑令の上谷の寇贊（続は讃）を推して主と為し，以て魏に降る，魏主の嗣は贊を拜して魏郡太守とす。之久しく，秦、雍人の魏之河南、滎陽、河内に流入する者は，戸は以て萬を數える。嗣は乃ち南雍州を置き，贊を以て刺史と為し，河南公に封じ，洛陽に治せしめ，雍州の郡縣を立てて以て之を撫す。贊は善く招き懷しみ，流民の之に歸する者は，其の初めの三倍となる。

【赫連勃勃は長安攻略へ】

夏 **〔夏王は早速關中の篡奪に着手〕**夏王の勃勃は太尉の裕の東に還るを聞き，大いに喜び，王買徳に問いて曰く、

「朕は關中を取らんと欲す、卿は試しに其の方略を言え。」

買徳は曰く、

「關中は形勝之地なり、而るに裕は幼子を以て之を守らせる。**(7-170p)** 狼狽して而して歸れば、正に急に篡（奪）する事を成さんと欲する耳、復た中原を以て意を為すに暇あらず。此くは天の關中を以て我に賜うべし、失う可からざる也。青泥、上洛は、南北之險要なり、宜しく先ず遊軍を遣わして之を斷つべし。東に潼關を塞げば、其の水陸之路を絶たん。然る後に三輔に檄を傳え、施すに威徳を以てすれば、則ち義真は網罟之中に在り、取るに足らざる也。」

勃勃は乃ち其の子の撫軍大將軍の瑰を以て前鋒の諸軍事を都督し、騎二萬を帥いて長安に向かわしむ。前將軍の昌をして潼關に屯ぜしめ、買徳を以て撫軍右長史と為し、青泥に屯さしめ、勃勃は大軍を將いて後繼と為る。

●是の歲、魏の都坐大官の章安侯の封懿は卒す。

安皇帝癸義熙十四年（戊午，418年）

●**春，正月**（元嘉曆二月），丁酉（1日）朔，魏主の嗣は平城に至り，護高車中郎將の薛纂に命じて高車、丁零を帥いて北略せしめ，弱水（満州の西喇木倫河）に至りて而して還る。

■辛巳（45日?），大赦す。

夏 ■ **〔夏が迫る中、沈田子は王鎮惡を斬り大混乱に〕**夏の赫連瑰は渭陽に至り，關中の民の之に降る者は路に屬く。龍驤將軍の沈田子は兵を將いて之を拒み，其の衆の盛んなるを恐れ，退きて劉回堡に屯し，遣使して還りて王鎮惡に報ぜしむ。鎮惡は王修に謂って曰く、

「公（劉裕）は十歳の兒を以て吾が屬に付す、當に共に力を竭くさんを思うべし。而るに兵を擁して進まず、虜は何に由りてか平らぐを得ん！」

使者は還り、以て田子に告ぐ。田子は鎮惡と素より相い圖る之志有り、是に由りて益々忿懼す。未だ幾くばくもなく、鎮惡は田子と俱に北地（長安の地）に出でて以て夏兵を拒み、軍中は訛言す、

「鎮惡は南人を殺し盡くし、數十人を以て義真を送りて南に還さんと欲す。因りて關中に據りて反せん。」辛亥（15日）、田子は鎮惡に請いて傳弘之の營に至らしめ事を計る。田子は人を屏けて語るを求め、其の宗人の沈敬仁をして之を幕下に斬ら使む、矯して、

「太尉の令を受けて之を誅す」

と稱す。弘之は奔りて劉義真に告げ、義真は王修と甲を被りて横門（長安城の北出東頭の第一門）に登りて以て其の變を察す。俄に而して田子は數十人を帥いて來たり至りて、言う、

「鎮惡は反す。」

修は田子を執り、數（罪を数々数え上げる）むるに專戮を以てし、之を斬る。冠軍將軍の毛修之を以て鎮惡に代わりて安西司馬と為す。傳弘之は赫連瑰を池陽（陝西省關中道三原県、現・咸陽市三原県）に大いに破り、又た之を寡婦渡（甘肅省涇原道慶陽県、現・慶陽市慶陽県）に破り、斬獲は甚だ衆く、夏兵は乃ち退く。

■ 【劉裕は彭城に還り、變を知る】 壬戌（26日）、太尉の裕は彭城に至り、嚴を解く、琅邪王の徳文は先ず建康に歸る。裕は王鎮惡の死するを聞き、表して言う、

「沈田子は忽ち狂易（発狂して常心を変易する）を發し、奄ち忠勳を害せり」、鎮惡に追贈して左將軍、青州刺史とす。

■ 彭城内史の劉遵考を以て并州刺史と為し、河東太守を領さしめ、蒲阪に鎮せしむ。荊州刺史の劉道憐を征（統は徴）して徐、兗二州刺史と為す。

■ 【諸王子の配置も再検討】 裕は世子の義符を以て荊州に鎮ぜしめ、徐州刺史の劉義隆を以て司州刺史と為し、(7-171p) 洛陽に鎮ぜしめんと欲す。中軍諮議（參軍）の張邵は諫めて曰く、

「儲貳（跡継の太子）之重きは、四海の繫かる所、宜しく外に處るべからず。」

乃ち更に義隆を以て都督荊、益、寧、雍、梁、秦六州諸軍事、西中郎將、荊州刺史と為し、南郡太守の到彦之を以て南蠻校尉と為し、張邵を司馬と為し、南郡相を領せしめ、冠軍功曹の王曇首を長史と為し、北徐州（晉は北徐州を彭城、南徐州を京口に治す）從事の王華を西中郎主簿と為し、沈林子を西中郎參軍と為す。義隆は尚ほ幼なく、府事は皆な邵が決す。曇首は、弘之弟也。裕は義隆に謂って曰く、

「王曇首は沈毅にして器度有り、宰相の才也、汝は事毎に之を咨れ。」

■ 南郡公の劉義慶を以て豫州刺史と為す。義慶は、道憐之子也。

■ 裕は司州を解き、徐、冀二州刺史を領す。

西秦 秦王の熾磐は乞伏木弈干を以て沙州刺史と為し、樂都に鎮せしむ。二月（元嘉曆三月）、乙弗の烏地延は戸二萬を帥いて秦に降る。

■ 三月（元嘉曆三月閏月）、遣使して魏に聘す。（これにより北魏は南の戦力を北に割ける）

【北魏は大挙して二道から北燕和龍を襲い、馮跋は高句麗領に浸潤】

● 【北魏と北燕の抗争】 夏、四月、己巳（4日）、魏は冀、定、幽三州の徒河（慕容氏に従い中国に入り三州に留まるを徒河という。北魏が中山を取り、安州を置き慰撫、天興三年定州という。中山・常山・鉅鹿・博陵・北平・河間・高陽・趙郡）を代都に徙す。

▲ 【和龍に赤氣、馮跋危機感】 初め、和龍に赤氣有り四もに塞がりて日を蔽い、寅より申に至る、燕の太史令の張穆は燕王の跋に言つて曰く、

「此れは兵氣也。今魏は方に強盛なり、而るに其の使者を執り（於什門を留める事 116 卷義熙十年にあり）、好命は通じず、臣は竊かに焉を懼れる。」

跋は曰く、

「吾も方に之を思う。」

● 〔北魏は二道から北燕・和龍を襲撃〕 **五月**、魏主の嗣は東巡し、濡源（濡水の源、北平の北、宇文部の西）に至り甘松（濡源の東、和龍の西）に及び、征東將軍の長孫道生、安東將軍の李先、給事黃門侍郎の奚觀を遣わして精騎二萬を帥いて燕を襲い、又た驍騎將軍の延普、幽州刺史の尉諾に命じて幽州より兵を引いて遼西に趨き、之が聲勢を為さしめ、嗣は突門嶺に屯して以て之を待つ。道生等は乙連城を抜き、進みて和龍を攻め、燕の單于（義熙七年に單于四輔を置く）の右輔の古泥と戦い、之を破り、其の將の皇甫軌を殺す。燕王の跋は城を嬰して自ら守り、魏人は之を攻め、克たず、其の民萬餘家を掠めて而して還る。

■ 〔劉裕はついに宋公となる〕 **六月**、太尉の裕は始めて（義熙 12 年に命下るもここで受ける）相國、宋公、九錫之命を受ける。國中の殊死以下を赦し、繼母の蘭陵の蕭氏を崇^{たつと}びて太妃と為す。太尉の軍諮祭酒の孔靖を以て宋國の尚書令と為し、左長史の王弘を僕射と為し、選を領せしめ、從事中郎の傅亮、蔡廓は皆な侍中と為し、謝晦を右衛將軍と為し、右長史の鄭鮮之を奉常と為し、行參軍の殷景仁を秘書郎と為し、其の餘の百官は、悉く天朝之制に依る。靖は辭して受けず。亮は、鹹（傳咸は武帝・惠帝の間に事え直を以て顯わる）之孫。廓は、謨（蔡謨は成帝・康帝・穆帝に歷事）之曾孫。鮮之は、渾（鄭渾は 66 卷漢獻帝建安 17 年にあり）之玄孫。景仁は、融（殷融は 94 卷成帝咸和三年にあり）之曾孫也。景仁は學びて文を為さず、敏にして思致有り。口は義を談ぜずも、深く理體に達す。國典、朝儀、舊章、記注に至り、撰錄せざるは莫く、識者は其の當世之志有るを知る。（7-172p）

● 〔崔宏死去〕 魏の天部大人（去年魏は天地四方の六部大人を置く）の白馬文貞公の崔宏は疾篤く、魏主の嗣は侍臣を遣わして病を問うこと、一夜に數々返す。及に卒し、群臣及びの附國（属国）の渠帥に詔して皆な會葬せしむ。

● **秋、七月**、戊午（24 日）、魏主の嗣は平城に至る。

● 〔魏の民租〕 **九月**、甲寅（27 日）、魏人は諸州に命じて民租を調すること、戸に五十石、定、相（魏・陽平・廣平・汲郡・東郡・頓丘・濮陽・清河の郡を領す）、冀（長樂・渤海・武邑・章武・樂陵を領す）の三州に積ましむ。

〔北涼〕 〔西涼〕 〔蒙遜は西涼を攻める〕 河西王の蒙遜は復た兵を引いて涼を伐ち、涼公の歆は將に之を拒まんとし、左長史の張體順は固く諫め、乃ち止む。蒙遜は其の秋の稼^かぎを芟りて而して還る。

〔西涼〕 ■ 〔西涼は東晋に称藩〕 歆は遣使して來たりて位を襲うを告げる。**冬、十月**、歆を以て都督七郡（敦煌・酒泉・晉興・建康・涼興と李嵩の置く會稽・廣夏）諸軍事、鎮西大將軍、酒泉公と為す。

〔西秦〕 〔姚艾は西秦に従う〕 姚艾は秦に叛し、河西王の蒙遜に降り、蒙遜は兵を引いて之を迎える。艾の叔父の俊（統は雋）は衆に言つて曰く、

「秦王は寛仁にして雅度有り、自ら安居して之に事える可し、何為れぞ河西王に従いて西に遷るや！」衆は鹹な以て然ると為し、乃ち相い與に艾を逐い、俊を推して主と為し、復た秦に歸す。秦王の熾磐は俊を征（統は徴）して侍中、中書監、征南將軍と為し、賜わりて隴西公を爵し、左丞相の曇達を以て都督洮、罕（臨洮・枹罕）以東諸軍事、征東大將軍、秦州牧と為し、南安に鎮ぜしむ。

【劉義真是長安を失い、全軍撤退へ、朱齡石の最後】

■ 〔劉義真是腹心の王修を誅殺し、長安に籠もり、夏に封鎖される〕 劉義真是年少^{わか}く、左右に賜與するに節無し、王修は裁する毎に之を抑える。左右は皆な怨り、修を義真に譜^うりて曰く、

「王鎮惡は反せんと欲し、故に沈田子は之を殺す。修は田子を殺し、是れ亦た反せんと欲する也。」
義真是之を信じ、左右の劉乞等をして修を殺さしむ。修は既に死し、人情は離れ駭き、相い統壹する莫し。義真是悉く外軍（蒲阪の魏の押え、渭北の夏の押え）を召して長安に入れ、閉門して拒み守る。關中の郡縣は悉く夏に降る。赫連瑰は長安を襲い、克たず、夏王の勃勃は進みて咸陽に據り、長安の樵采の路は絶える。

■ 〔劉裕は劉義真に換え朱齡石を長安に派遣〕 宋公の裕は之を聞き、輔國將軍の蒯恩をして長安に如か使め、義真を召して東に歸らしむ。相國の右司馬の朱齡石を以て都督關中諸軍事、右將軍、雍州刺史と為し、代わりて長安に鎮せしむ。裕は齡石に謂って曰く、

「卿は至り、義真に敕して輕装して速かに發せしむ可し、既に關を出れば、然る後に徐行す可し。若し關右必ず守る可からざれば、義真と俱に歸る可し。」

又中書侍郎の朱超石に命じて河、洛を慰勞せしむ。

■ 〔劉義真の散々たる長安からの逃亡〕 十一月^{ほしいまま}、齡石は長安に至る。義真の將士は食すること縦^{ほしいまま}にし、大いに掠して而して東し、多く寶貨、子女を載せ、軌を方べて徐行す。雍州の別駕の韋華（元姚氏の臣、劉裕が任命）は夏に奔り、赫連瑰は衆三萬を帥いて義真を追う。建威將軍の傅弘之は曰く、

「公は處分して亟^{すみやか}かに進むべし。今多く輜重を將い、一日に行きて十里に過ぎず、虜の追騎は且^{まさ}に至らんとし、何を以て之を待つや！（7-173p）宜しく車を棄てて輕行せん、乃ち以て免かる可し。」

義真是從わず。俄に而して夏兵は大いに至り、傅弘之、蒯恩は後を斷ち、力戰すること連日、青泥に至り、晉兵は大敗し、弘之、恩は皆な王買德（先に青泥に屯して取る）の禽する所と為る。司馬の毛修之は義真と相い失い、亦た夏兵の禽する所と為る。義真是行きて前に在り、日暮に會して、夏兵は窮追せず、故に免かるを得る。左右は盡く散り、獨り草中に逃げ。中兵參軍の段宏は單騎にして追ひ尋ね、道に縁いて之を呼び、義真是其の聲を識り、出でて之に就き、曰く、

「君は段中兵に非ざる邪？身は此に在り、行け矣！必ず兩りながら全くせず、身（自分自身）の頭を刎ねて以て南す可し、家公（魏晉時代、父親をいう）をして望みを絶え使めん。」

宏は泣いて曰く、

「死生は之を共にせん、下官は忍びず」

乃ち義真を背に束ね、單馬にして歸る。義真是宏に謂って曰く（下線部欠、続により補充）

「今日之事は、誠に算略無し。然れども丈夫は此くを経ざれば、何を以て艱難を知らん！」

夏 〔勃勃は長安に入場〕 夏王の勃勃は傅弘之を降さんと欲し、弘之は屈せず。時に天は寒く、勃勃は之を裸にし、弘之は叫び罵し而して死す。勃勃は人頭を積みて京觀と為す、號して髑髏台と曰う。長安の百姓（義真の涼奪を怨む）は朱齡石を逐い、齡石は其の宮殿を焚き、潼關に奔る。勃勃は長安に入り、大いに將士に饗し、觴（酒杯）を舉げて王買德に謂って曰く、

「卿の往日之言は、一期（一年）に而して驗あり、算に遺策無しと謂う可し。此の觴の集まる所、卿に非ずして而して誰あるや！」

買德を以て都官尚書と為し、河陽侯に封じる。

■ 〔朱齡石・朱超石兄弟の最後〕 龍驤將軍の王敬先是曹公壘（陝西省潼關にある、曹操が悍馬を伐って築く、現・渭南市潼關県秦東鎮）に戍し、齡石（蜀を討つなどの功績大の將軍）は往きて之に従う。朱超石は蒲阪に至り、齡石の所在を聞き、亦た往きて之に従う。赫連昌は敬先の壘を攻め、其の水道を斷つ。衆は渴し、戦う能わず、城

は且に^{まさ おちい}陥んとす。齡石は超石に謂って曰く、

「弟兄が俱に異城に死せば、老親をして何を以て心と為さ使めんや！爾^{なんじ}は問道を求めて亡げ歸らん、我は此に死すとも、恨む無し矣。」

超石は兄を持ちて泣いて曰く、

「人は誰か死せざらん、寧ぞ今日兄を辭して去るに忍びん乎！」

遂に敬先及び右軍參軍の劉欽之と皆な執らえて、長安に送被れ、勃勃は之を殺す。欽之の弟の秀之は悲泣して歡を燕せざる者十年。欽之は、穆之の從兄子也。

■〔劉裕は再度の北伐を期すも中止〕宋公の裕は青泥の敗を聞き、未だ義真の存亡を知らず、怒り甚しく、日を刻して北伐せんとし、侍中の謝晦は諫めて以て、

「士卒は疲弊し、它年（翌年）を俟つを請う、

従わず。鄭鮮之は上表して、以て為す、

「虜は殿下の親征を聞き、必ず力を併せて潼關を守らん。徑ちに往きて之を攻めれば、恐らくは未だ克つ可きこと易からず。若し輿駕が洛に頓まれば、則ち上聖躬を勞するに足らず。且つ虜は志を得ると雖も、敢えて勝ちに乗りて關陝を過ぎる者あらず、猶ほ大威に懾服（服従）し、將來之慮りを為す故也。若し洛に造りて而して返れば、虜は必ず更に揣（推し量る）量之心有り、或は益々邊患を生じん。（7-174p）況んや大軍の遠く出れば、後患は甚だ多し。昔歲西征（江陵への侵攻）すれば、劉鍾は狼狽（11年にあり、盜、治亭を襲う時をいう）す。去年北を討ち、廣州は傾覆す（徐道行の廣州を陥とす事）。既往之效（經驗）は、後來之鑒（教訓）也。今諸州に大水あり、民食は寡く乏しく、三吳の群盜は諸縣を攻め没し、皆な征役に困るに由る故也。江南の士庶は、領を引き顛顛（顔色和やか）として以て殿下之返旆（旗を返す、軍を返す）を望む、更に北に出ると聞き、淺深之謀、往還之期を測らず、臣は恐る、返顧之憂いは更に腹心に在らん也。若し西虜が更に河、洛之患を為すを慮る者は、宜しく好みを北虜と結ぶべし。北虜（北魏）は親しめば則ち河南は安じ、河南安じれば則ち濟、泗は靜かならん矣。」

會^{たまたま}段宏の啟を得、義真の免かるるを得るを知り、裕は乃ち止み、但だ登城して北を望み、慨然として流涕して而して已む。義真を降して建威將軍、司州刺史と為す。段宏を以て宋台の黃門郎と為し、太子の右衛率を領せしむ。裕は天水太守の毛德祖を以て河東太守と為し（胡三省曰く、裕は德祖が善く守るを知りて用いると雖も、然れども人心已に揺らぐ、宜なり其の固きこと能わざるや）、劉遵考に代わりて蒲阪を守らしむ。

夏王の勃勃は壇を灞上に築き、皇帝に即位し、改元して昌武とす。

西秦西秦王の熾磐は東巡す。十二月、上邽の民五千餘戸を枹罕に徙す。

【昌明之後に尚ほ二帝、劉裕篡奪へ】

●〔彗星八十餘日は劉裕篡奪の兆しと、崔浩登場〕彗星は天津に出、太微に入り、北斗を経て、紫微に絡み、八十餘日而して滅せず。（晉書天文志にその四星は、一に天津。太微は天子の庭、北斗の南。紫微の十五星は北斗の北）魏主の嗣は復た諸儒、術士を召して之に問いて曰く、

「今四海は分裂し、災咎^{キョウ}之應は、果たして何くの國の在るや？朕は甚だ之を畏れる。卿が輩は言を盡くし、隱す所有る勿かれ！」

衆は崔浩を推して對え使め、浩は曰く、

「夫れ災異之興こるは、皆な人事の像なり、人は苟くも覺無ければ、又た何を畏れん焉？昔王莽は將に漢を篡わんとし、彗星の出入するは、正に今と同じくす。國家の主は尊く臣は卑しく、民は異望無し、晉室

は陵夷（次第に衰退）して、危亡は遠からず。彗之異を為すは、其の劉裕の將に之を篡するに應ず乎！」
衆は以て其の言を易える無し。

■ 〔昌明之後に尚ほ二帝有りて、劉裕は皇帝縊殺〕 宋公の裕は讖を以て云う、

「昌明之後に尚ほ二帝有り」、(晉書帝記、初め簡文帝は讖を見、晉の祚は昌明に尽きんと。李大皇夢見て、神人は之に曰く、汝男を生めば昌明を以て名と為せと。生むに及び東方始めて明く。簡文は後に悟りて乃ち流涕すと。又曰く、讖に昌明之後に尚ほ二帝有り。裕は乃ち帝を縊りて恭帝を立て、以て二帝に應ぜしむと)

乃ち中書侍郎の王韶之をして帝の左右と密かに帝に鳩(続は馱)し而して琅邪王の徳文を立てんと謀らしめる。徳文は常に帝の左右に在り、飲食寢處は、未だ嘗て暫くも離れず。韶之が之を伺い時を経れども、間を得ず。會々^{たまたま}徳文に疾有り、出でて外に居る。戊寅(17日)、韶之は散衣を以て帝(年は37)を東堂に於いて縊る。韶之は、虞^{くび}(王敦の從弟)之曾孫也。裕は因りて遺詔と稱し、徳文を奉じて皇帝の位に即かしめ、大赦す。

■是の歲、河西王の蒙遜は表を奉じて稱藩し、拜して涼州刺史と為す。

■尚書右僕射の袁湛は卒す。(7-175p)

恭皇帝 安皇帝癸元熙元年(己未、419年)

■春、正月、壬辰(1日)朔、改元す。

■琅邪王の妃の褚氏を立てて皇后と為す。后は、裒(崇徳太后の父)之曾孫也。

●魏主の嗣は犢渚(綏遠特別区域綏遠道圖原根河畔)に敗す。

■甲午(3日)、宋公の裕を征(続は徴)して入朝せしめ、爵を進めて王と為す。裕は辭す。

●癸卯(12日)、魏主の嗣は平城に還る。

■庚申(29日)、安皇帝を休平陵に葬す。

■劉道憐に敕して司空(を以て)出でて京口に鎮ぜしむ。

夏 〔毛徳祖は蒲阪を撤退し全軍彭城に歸る〕 夏の將の叱奴侯の提は步騎二萬を帥いて毛徳祖を蒲阪に攻め、徳祖は御する能わず、全軍彭城に歸る。

■二月、宋公の裕は徳祖を以て滎陽太守と為し、虎牢(河南省開封道汜水縣、漢の成皋縣、現・鄭州市滎陽市汜水鎮)に戍せしむ。

【赫連勃勃の戰略眼】

夏 〔勃勃は韋祖思を殺す〕 夏主の勃勃は隱土の京兆の韋祖思を征(続は徴)す。祖思は既に至り、恭懼すること過甚なり、勃勃は怒りて曰く、

「我は國土を以て汝を征(続は徴)し、汝は乃ち非類を以て我を遇す、汝は昔姚興に拜せず、今何の獨り我に拜すや？我は在りて、汝は猶ほ我を以て帝王と為さず。我死なば、汝曹は筆を弄び、當に我を何の地に置くべき邪！」

遂に之を殺す。

夏 〔勃勃は魏の侵略を恐れて長安に都せず〕 群臣は長安に都するを請い、勃勃は曰く、

「朕は豈に長安の歷世帝王之都にして、沃饒險固なるを知らざらんや！然れども晉人は僻遠にして、終に吾が患い^{うれ}を為す能わず。魏は我と風俗は略して同じくし、土壤は鄰接し、統萬より魏の境の距^{おず}は裁かに

百餘里にすぎず、朕が長安に在れば、統萬は必らず危うし。若し統萬に在れば、魏は必らず敢えて河を濟りて而して西せず。諸卿は適々未だ此れを見ざらん耳。」
皆な曰く、

「及ぶ所に非らざる也。」

乃ち長安に南台を置き、赫連瑰を以て大將軍、雍州牧を領せしめ、南台の尚書事を録せしむ。勃勃は統萬に還り、大赦し、改元して真興とす。

夏 **〔超残忍な赫連勃勃〕** 勃勃は性は驕虐にして、民を視るに草芥の如し。常に城上に居す、弓劍を側に置き、嫌忿する所有れば、手自ら之を殺す。群臣の^{さから}近い視る者は其の目を鑿ち、笑う者は其の脣を決き、諫する者は先ず其の舌を^き截りて而して後に之を斬る。

■ **〔司馬楚之の人望に刺客も仕える〕** 初め、司馬楚之は其の父の榮期之喪（114 卷安帝義熙二年にあり）を奉じて建康に歸り、宋公の裕の宗室之才望有る者を誅^{ちゅうせん}剪するに會い、楚之の叔父の宣期、兄の貞之は皆な死し、楚之は亡げて竟陵の蠻中に匿れる。從祖（祖が同じ）の休之（宣帝の弟で魏の中郎進の六世の孫）が江陵より秦に奔る（前卷義熙 11 年にあり）に及び、楚之は亡げて汝、潁間に之き、衆を聚めて以て復仇を謀る。楚之は少きとき英氣有り、能く節を折りて士に下り、衆は萬餘有り、長社に屯據す。裕は刺客の沐謙をして往きて之を刺さ使めんとするも、(7-176p)楚之は謙を待つに甚だ厚し。謙は發せんと欲し、未だ間を得ず、乃ち夜疾と稱し、楚之の必ず往きて疾を問うを知り、因りて之を刺さんと欲す。楚之は果たして自ら湯藥を^{もた}繼らし往きて疾を視んとし、情意は勤篤（懇懇懇篤）にして、謙は發するを忍びず、乃ち匕首を席下より出して、以て之に狀を告げて曰く、

「將軍は深く劉裕の忌む所と為る、願はくは輕率にする勿く以て自ら保全するべし。」

遂に身を委ねて之に事え、之の為に防衛す。

■ **〔王康の人望と洛陽守備〕** 王鎮惡之死する也、沈田子は其の兄弟七人を殺し、唯だ弟の康は免かるるを得、逃げて宋公の裕に彭城で就き、裕は以て相國行參軍と為す。康は洛陽に還りて母を視るを求める。長安の守らざるに會し、康は關中の徙民を糾合し、百許りの人を得、僑戸七百餘家を驅帥して、共に金墉城を保つ。時に宗室は多く逃亡して河南に在り、司馬文榮なる者有りて、乞活（惠帝の時に并州荒廢し吏民は東燕王騰に従い東下、乞活という。この後流浪して食を乞う者も謂う）千餘戸を帥いて金墉城（洛陽城の北西角の別廓、現・洛陽市）の南に屯す；又た司馬道恭有りて、東垣（河南省河洛道洛陽県、現・洛陽市新安県）より三千人を帥いて城西に屯し、司馬順明は五千人を帥いて陵雲台に屯し、司馬楚之は柏谷塢に屯す。魏の河内鎮將の於栗磾は騎を游ばせて芒山の上に在り、攻め逼りて交々至り、康は堅守すること六旬。裕は康を以て河東太守と為し、兵を遣わして之を救い、平等（一説に司馬文榮を推す邵平か）は皆な散り走る。康は農桑を勸め課し、百姓は甚だ親しく之に頼る。

●司馬順明、司馬道恭及び平陽太守の薛辯は皆な魏に降り、魏は辯を以て河東太守と為し以て夏人を拒ましむ。

西秦夏、四月、秦の征西將軍の孔子（乞伏氏）は騎五千を帥いて吐谷渾の覓地を弱水（張掖河）の南に討ち、大いに之を破り、覓地は其の衆六千を帥いて夏に降り、拜して弱水護軍とす。

●庚辰（21日）、魏主の嗣は東廟に事（祭）有り、祭りを助ける者は數百國。辛巳（22日）、南巡して雁門に至る。

●五月、庚寅（1日）朔、魏主の嗣は漁を壘（ゝつき）水（山西省雁門道桑乾河）に觀る。己亥（10日）、平城

に還る。

【西涼の李歆の不出来】

西涼 **〔西涼公への張顯の諫言〕** 涼公の歆は刑を用いて嚴に過ぎ、又た宮室を治めるを好む。從事中郎の張顯は上疏して、以て為す、

「涼土は三分（李氏・沮渠・乞伏）し、勢いは支えて久しからず。兼併之本は、農に務めるに在り。遠くを懷くる之略は、寛簡に如くは莫し。今歲に入りて已來、陰陽は序を失ひ、風雨は和に乖く。是れ宜しく膳を減じ懸（音楽）を撤し、身に側め道を修むべし、而るに更に刑は繁く法は峻なりて、繕築は止まず、殆んど興隆を致す所以に非ざる也。昔文王は百里を以て而して興こり、二世（秦の二世）は四海を以て而して滅びる、前車之軌は、得失は昭然たり。太祖（李嵩）は神聖之姿を以て、西夏の推す所と為り（112 卷安帝隆安四年にあり）、左に酒泉を取り（隆安五年）、右に西域を開く（隆安四年）（7-177p）。殿下は遺志を承けて奉じる能わず、涼土を混壹し、蹤を張后（張軌及び其の子若孫をいう）に倣しくする能わず、將に何を以て下に先王に見えんとする乎！沮渠蒙遜は、胡夷之傑、内に政事を修め、外は英賢に禮し、攻戰之際は、身は士卒に先んじ、百姓は之を懷み、之が為に用いるを楽しむ。臣は謂うに殿下は但だ蒙遜を平殄（悉く平定する）するに能わざるに非ず、亦た懼らくは蒙遜が方に社稷之憂と為らん。」

歆は之を覽じ、悦ばず。

西涼 **〔涼公は主簿の汜の諫言も無視〕** 主簿の汜は上疏と稱して諫めて曰く、

「天之人主を子として愛するは、殷勤にして至る矣。故に政之修まらざるは、災異を下し以て之を戒告し、改める者は危と雖も必ず昌とし、改めざる者は安と雖も必ず亡す。元年三月癸卯、敦煌の謙德堂（李嵩は敦煌を得て晉に稱藩し謙德堂を起す）は陷いる。八月、效穀の地は裂く。二年元日、昏霧（砂嵐?）は四ほう塞がる。四月、日赤くして光無く、二旬して乃ち復す。十一月、狐は南門に上る。今茲に春、夏、地は頻りに五たび震う。六月、隕星は建康にあり。臣は學は稽古せずと雖も、行年五十有九、請う殿下の為に耳目之聞見する所を略言し、復た能く遠く書傳之事を論ぜざる也。乃ちの者は鹹安（晉の簡文帝の年号）之初、西平は地裂け、狐は謙光殿の前に入る。俄に而して秦の師は奄至し、都城は守らず。梁熙は既に涼州と為り、百姓を撫せずして、専ら聚斂を為し、建元（秦の苻堅の年号）十九年、姑臧の南門は崩れ、閑豫堂に隕石あり。明くる年呂光は殺される所と為る。段業は制を此の方に稱し、三年之中に、地震は五十餘所。既に而して先王は瓜州（敦煌郡）に龍興し、蒙遜は張掖に篡弒す。此れ皆な目前之成事なり、殿下は明らかに知る所也。效穀（李嵩は效穀令から始まる）は、先王の鴻漸（漸々の発祥地）之地。謙德は、尊に即くの之室なり。基が陷り地が裂け、大凶之徴也。日者、太陽之にして、中國之象なり。赤は而して光無きは、中國の將に衰えんとす。諺に曰く、『野獸家に入れば、主人は將に去らん。』狐の南門に上がるは、亦た變異之大なる者也。今蠻夷は益々盛んにして、中國は益々微なり。願はくは殿下は亟かに宮室之役を罷め、游畋之娛を止め、英俊を延禮し、百姓を愛養し、以て天變に應じ、未然に防がん。」

歆は従わず。

■秋、七月、宋公の裕は始めて進爵之命を受ける。八月、移して壽陽に鎮し、度支（軍国の支計を司る）尚書の劉懷慎を以て督淮北諸軍事、徐州刺史と為し、彭城に鎮ぜしむ。

●辛未（14日）、魏主の嗣は東巡す。甲申（27日）、平城に還る。

■九月、宋王の裕は自ら揚州牧を解く。

後秦 秦の左衛將軍の**匹達**等は兵を將いて**彭利和**を**澧川**（四川省西川道松潘県、現・アバ・チベット族チャン族自治州松潘県）に討ち、大いに之を破り、**利和**は單騎にて仇池に奔る。其の妻子を獲り、羌豪三千戸を枹罕に従し、澧川羌の三萬餘戸は皆な安堵して故の如し。（7-178p）**冬，十月**，尚書右僕射の**王松壽**を以て益州刺史と為し、澧川に鎮ぜしむ。

■ **「蕭太妃の要望にも、劉道憐を用いず」** 宋王の**裕**は河南の蕭條たるを以て、乙酉（28日）、司州刺史の**義真**を徙して揚州刺史と為し、石頭に鎮ぜしめ、**蕭太妃**は**裕**に謂って曰く、
「**道憐**（蕭太妃の生む所）は汝の布衣の兄弟なり、宜しく用いて揚州と為すべし。」

裕は曰く、

「**寄奴**（劉裕の小子）は**道憐**に於いて、豈に惜しむ所有らんや！揚州は根本の寄る所、事務は至って多く、**道憐**の了する所に非ず。」

太妃は曰く、

「**道憐**は年は五十を出る、豈に汝の十歳の兒に如かざる邪？」

裕は曰く、

「**義真**は刺史と為ると雖も、事は大小と無く、悉く**寄奴**に由る。**道憐**は年長にして、親ら其の事をせずば、聽望に於いて足らず。」

太妃は乃ち言無し。**道憐**は性は愚鄙に而して貪縦、故に**裕**は肯えて用いず。

■ **十一月**，丁亥（1日）朔，日之を食する有り。

● **十二月**，癸亥（7日），魏主の**嗣**は西巡して雲中に至り，君子津より西して河を渡り，薛林山に大獵す。

■ 辛卯（35日?），宋王の**裕**は殊禮を加え，**王太妃**を進めて**太后**と為し，世子を**太子**と為す。

令和2年8月16日	完訳開始	11440文字	
令和2年8月21日	完訳終了	22480文字	
令和2年12月4日	微修正	22715文字	年表・現代地名対応
令和3年12月30日	書下し終了	23628文字	